アメリカ縦断ドライブ

なんてったって
メキシコ湾

Dec. 25,2003 to Dec.28,2003

今回の記録

日程　　発　　着　　ドライブ距離　宿泊

日程	発	着	ドライブ距離	宿泊
第一日目	Vincennes	Clarksdale	462 miles	Comfort inn 70.8
第二日目	Clarksdale	Lafayette	575 miles	Quality inn 67.15
第三日目	Lafayette	Tupelo	520 miles	Comfort inn 63.9
最終日、四日目	Tupelo	Vincennes	484 miles	Total　2041 miles

携行品で思わず役に立ったもの

パソコン　毎日の宿で、その日の記録をすぐに打ち込めること、これで、宿で仕事が存分にできる。むしろ、時間が足りないくらいだ。

携帯のレコーダー

ドライブの途中、運転しながらでも気のついたことを記録できる。意外とあとで忘れてしまうようなこともきっちりと記録に残せるの多いに役に立つ。

ドライブマップ

それぞれの州境にあるレストハウスで手にいれたもの。ドライブマップとして有効に使える。

ティキーラ

毎晩の寝る前の睡眠剤がわり。これで、なれない土地でもすぐにぐっすりと快適な眠りにつくことができる。小さな瓶に詰め替えていったのも正解。

クーラーボックス

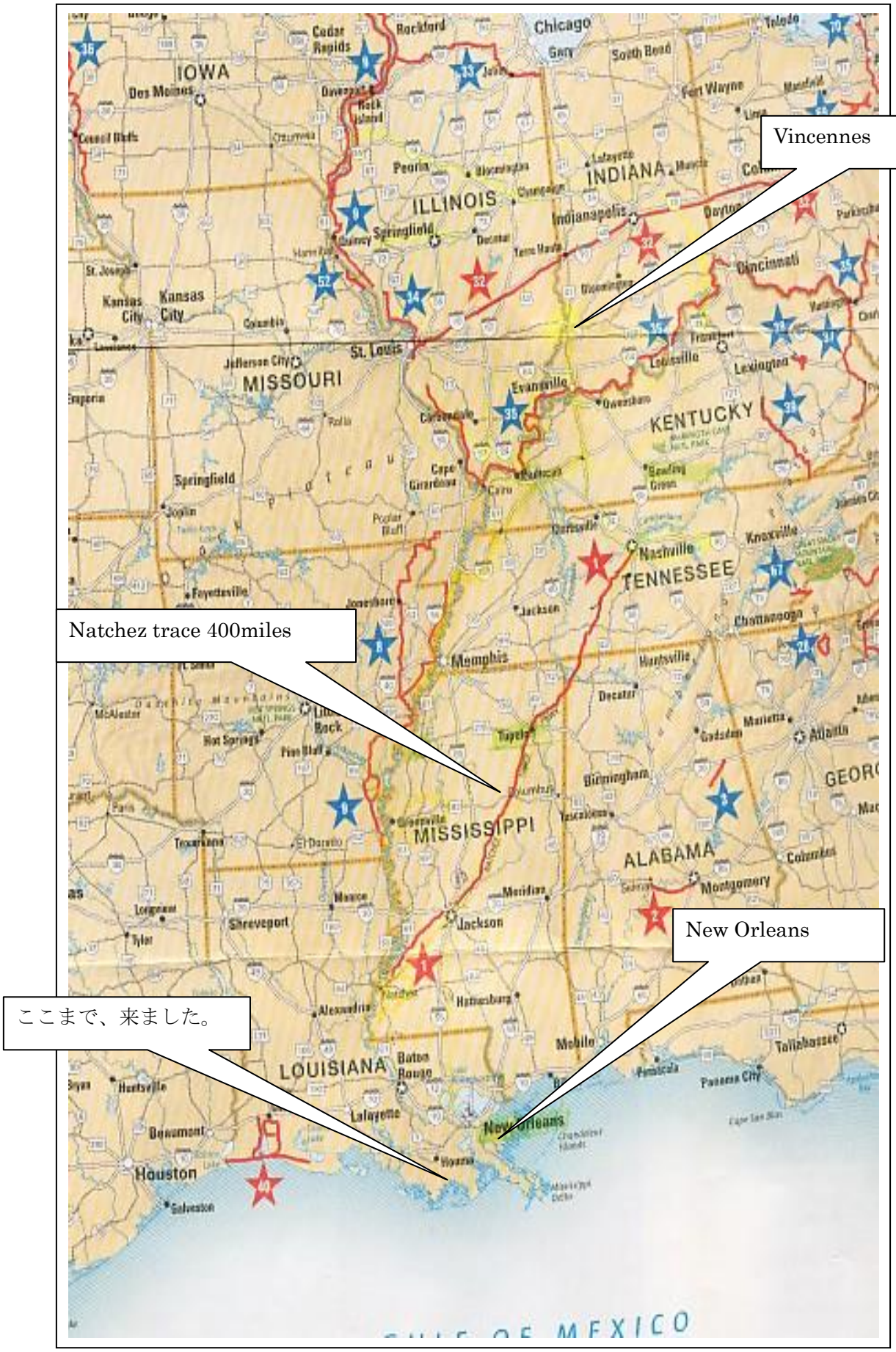
これは、途中で購入したものだが、食べ物、飲み物を冷やしておけばいつでも新鮮なものが食べられる。とくに、冷蔵庫のない宿でも、氷があるから、急遽、冷蔵庫の代わりにもなる。

三脚

八㎜カメラの固定用に持っていったが、自動で写真を撮るときには是非、もうひとつ三脚が必要。

宿の一覧ブック

Comfort Inn のチェーン店の掲載された本。
これに乗っているところを探して、そこに宿泊することにしたが値段も手ごろだし、宿も十分に空き部屋がある。


Vincennes
Natchez trace 400miles
New Orleans
ここまで、来ました。
IOWA
ILLINOIS
INDIANA
MISSOURI
KENTUCKY
TENNESSEE
MISSISSIPPI
ALABAMA
LOUISIANA
Chicago
St. Louis
Memphis
Nashville
Jackson
New Orleans
Houston
GULF OF MEXICO

とにかく、この広いアメリカ、どのくらい広いかということを表現するには、どんな形容詞がもっとも適しているのか、それを探しに一人旅をすることにした。今回のコースは、時節柄、北の方は雪の心配があるので、ビンセンスを振り出しにとにかく南に下ることにした。日本と違い軍事目的の気象レーダーをベースにした天気予報はよく当たる。それによれば、クリスマス休暇となるこの週末は高気圧がアメリカ大陸を覆うとのことでまずまずの天気のようだ。そんなことから遠出をしても大丈夫だろうと、前から考えていたNashvilleを最終地点にして、MATCHEZ TRACE PARKWAY という、ドライブをしながら景色を楽しめるというコースをたどることにした。このドライブコースは 「THE MOST SWCENIC DRIVES in AMERICA 120 コースの 114 番目にリストアップされたMISSISSIPPI 州の Natchez という町から ALABAMA をぬけて、TENNESSEE のNashvilleまで、約450Milesのドライブである。このNatchezと言う町がとにかく、嘗ての南部アメリカの優雅をいまにつたえる歴史的、かつ、ロマンチックな街ということだそうで、「風とともに去りぬ。」の主人公を思い描きながら、そんな雰囲気が味わえればと思う。なれないアメリカではあるがこの日のために毎週日曜日には、ドライブの練習をしてきた。その成果がいかほどか、今回は泊りがけでの遠出とし、思い切ってアメリカを堪能してみようということにした。

さあ、出発

一日目は、まず、行き慣れたEvansville から、オハイオ川を渡り、ケンタッキー州に入る。41 号線をまっすぐ南に下ればよいのだが、これがなかなかそうはいかない。バイパスがあって、これにうまく乗らないとやたらと時間が掛かってしまう。地図を見ながら町の名前を覚えるのであるが、いざ、分岐点でその町が表示されていればよいが、実際には、その先のさらに大きな町の名前や、近くの小さな村の名前になっていて、これがなかなかスムーズには行かない。それでも、道路はすべて東西南北であるから、道を間違えてもすぐに自分の進んでいる方向が確認できるので、安心して間違えることができる。今日は何度か、この経験をしたが、日本と違い少しもあわてることなく、四角形の三辺を通ってくれば、もとの正しい道に戻ることを経験した。前回、イリノイからオハイオ川を見に行ったときと逆の高速道路をただひたすら、南に、そして、時々、西に進む。こうして第一の目的地、メンフィスまでまっしぐらのドライブとなった。

それでも途中、休憩のつもりで、プリンストン、これは、トヨタ自動車のあるところとは違い、24 号線の脇にある小さな町であるが、ここでも町の中心には立派な教会があり、この地の人の新人深さを感じた。この道は、イリノイのPaducahに続く道で、少し起伏があるが林の中をすり抜けており、春にここをドライブしたらどれだけ快適かと心がおどった。横に長いケンタッキーの西の果てにMayfieldという町がある。高速を分かれるときの目印になっていた町なので、どんな町かなと、ここで休憩をすることにして、街をぐるりと走ってみた。どこの町にもある給水塔のあたりに一際目立ついかめしい建物があり、こ

ベンジャミン・フランクリンの銅像

れは、裁判所のようであった。これがロータリーになっていて、町がここを中心にして営まれている。この建物の脇にプレートがあり、そこにはベンジャミン・フランクリンの名前を見つけることができる。雷が電気であることを証明した科学者であるが、なるほど、この町の辺りによくトルネードが発生したのかもしれない。

ここを通りぬけると道はテネシー州の西の端を南に下ることになる。州の境はミシシッピー川で、川の向こうがアーカンサスである。そして、南の州のミシシッピーとの境にメンフィスがある。ここまでのドライブではほとんど高層ビルを見ることはなかったが、さすがにメンフィスは違う。このあたりの中心都市であるだけに、道路の両脇には工場がたくさんあるし、ま　　た、町の中心街には、立派なデパートもある。が、なんとなく、どこも只、だだっ広く町ができているので、ほとんど混んでいるといる感じはしない。なんとなく閑散としているのである。日本的感覚では、まさにゴーストタウン的な表現がぴったりかもしれない。さすが、ここまでくると、町の中には黒人が多く、それだけでも随分南に来たのかなという感じがした。古い建物は、フランスを感じさせるものがあり、また、エジプトにあるような銅像も見られた。

HIGHWAY は滑走路なのだ

第一目の目的は、とにかくメンフィスにたどりつくことであったが、計算では、この先のクラークスデイルまで行くことにしていた。メンフィスから 70 ㌔くらい南に来たところにあるが、この町のホテルを捜してあったのでとにかくここまで行くことにした。時間はすでに四時を回っていたが、ビンセンスではこの時間になるとやや暗くなってしまうが、さすが、ここは南だ。まだ五時でも日は水平線の上にある。この間の 61 号線という道を走るが、この道のところどころにやたらと AIRPORT A HIGHWAY という標識がある。そういえば、インディアナでも田舎の道を走っているととにかくまっすぐで、これならいつでも飛行機の離着陸ができるなと感心していたら、やはり、考えることは同じで、この高速道路はいつでも軍事用、あるいは、緊急用の飛行場ということらしい。まっすぐな道路は、両脇の邪魔なものは整備されていて、いつでも使えるまさに隠れた飛行場だ。ちなみにこの道路には、ところどころに飛行機のマークがしてある。この道がいやにまっすぐな道だなと気付いて、ハンドル操作をしない道の距離を測ったら、20 マイル以上あった。それまでに数マイルは走っていたので。結局、25 マイル、40 ㌔近くがとにかく直線道路になって

いる。これなら車の運転も楽だ。いや、退屈だと言うほうが適当かもしれない。
宿は行き当たりばったりで探すことにしたが、この週末はクリスマスをはさんで旅行するが多く、ホテルがなかなか取れないと脅かされてきた。そんな気持ちがあり、ちょっと不安なところもあつたが、こうしてドライブしている間、道路は空いているし、旅行をしているような人もあまり見かけない。これなら大丈夫とたかをくくっていた。ところがメンフィスを過ぎたところで、やたらと南行きの道路が混雑してきた。とにかくこちらにきてこれほど車の多いのは見たことがない。次から次へと車が走っている。しかも自分と同じ61 号線を南に下っているのである。時間も時間だ。早く、宿泊を決めたドライスデイルに着かなくては、内心焦りを感じた。そんな気持ちで暫く走っていたらやたら道路わきの看板の CASINO と言うのが目に付く。何だろうかと思っていたら、そのうち、平原のなかに立派な建物がいくつも立ち並んでいる。道路のいたるところに、この CASINO という門がついた案内がある。あとで調べたら、ここはホテルあり、スポーツ施設あり、文化ホールがあり、ゴルフ場も三つのコースがあり、ホテルはなんと十以上、それに、このレゾートはミシシッピー川まで続いており、そこには例の水上 CASINO がある。挙句の果てに飛行場まである大変なレジャーセンターになっている。宿泊をしながら博打とレゾートができるようになっているようである。TUNICA というところで、有名な博打場のようである。そこに、あれだけたくさん走っていた車が、次々に吸い込まれて行ったのである。なるほど、クリスマスの週末に家族そろって CASINO でお楽しみということか。

どこまでもまっすぐな高速道路、

もっと南へ

一日目、無事目的地のクラークスデイルという町に宿をとることができた。役に立ったのは、ホテルガイド。こちらで手に入れたものだが、全国チェーンのホテルになっていて、日本のビジネスホテルのようなものだ。しかし、内容は、テレビ、冷蔵庫つき、大きなベッドには三人は入れる。仕事用の机もまた、ロッキングチェアーも定番だ。
これで大体 70 ﾄﾞﾙといったところ。この宿は、どこもインターの近くにあり、まさにドライブが中心のアメリカの生活と密着していることが良く分かる。これなら快適な宿泊ができる。

ケンタッキーとテネシーを超え、ミシシッピー州まできたのだから、これは自分としては上出来である。距離にしてやく約 450 マイル。とにかく南にくだったので、かなり遠くに来た感じがする。眺める景色にまだ秋の気配が残っている。地図でみて、明日の予定と

考えていたら、ミシシッピーの南はすぐルイジアナ。隅のほうにニューオーリンズの名前が目に付く。そこはもうメキシコ湾に望む南の国である。まあ、仕事でも、また、旅行でも二度とくることはないだろうと、そう思ったら、もう行かないわけにはいかない。予定を急遽変え、朝一時間早く立つことにして、この大旅行に挑戦することにした。クラークスデイルからニューオーリンズまでは直線にして、およそ 300 マイルである。どう考えても５時間かかる計算だ。今日の宿泊は昨日の調子で、とにかくいけるところまでの心意気で一路南に下る。

高速道路の地平線の下から太陽が昇る

これがアメリカの夜明け

出発はまだ、夜の明けぬ６時半、こちらは冬時間であり、５時半の計算だが、とにかく夜が明けるまでどこまでたどりつくかが問題だ。高速道路 55 号線はメンフィスからまっすぐ南に下る幹線でよく整備されているので、これにとにかく乗ることにした。対向車もほとんどなく、暗い道をただ一人はしるようにグリーンウッドにむけ、田舎道を 60—65 マイルで飛ばす。朝早いとは言え、パトカーに捕まっては万事休す。暗闇に潜んでいることも考慮して、ほどほどにアクセルを踏む。途中 82 号線を東に向かう頃から夜がしらけ始めた。およそ 50 マイルも走ったころであろうか。とにかく、アメリカにきてこんな素敵な夜明けを見るのは初めて。夕日は大地に吸い込まれるように沈むのであるが、朝日もまた、大地から悠然と顔を出してくる。暗いうちは空に雲が立ち込めていたが、この雲が朝日を浴びて赤く染まっている。ダークブルーの空が次第に、ライトブルーにかわっていく。この頃になると、あの雲たちはすっかり消えてしまっている。どこに行ったのかなと思うのだが、別段、風があるわけでもなし。太陽が昇ってきて、温度が上昇してそのまま消えるのだ。そして、今日も一日快晴の日が続く。朝日が夕焼けより力強く感ずるのは、これが一日の始まりということで気を引き締めてくれるからかも知れない。高速道路の先端が地平線まで続いているので、その先から太陽が顔を出してくると、本当にアメリカ大陸の大きさを実感する。

やがて、55 号にはいるのだが、このとき、前の車が遅いのでひょいと追い抜いた。案の定、主婦が安全運転をしているのである。ところが、そんなことに気をとられていたら、そこがジャンクションになっていたのだ。ついつい行過ぎてしまった。が、これがまたアメリカ人の合理的なところ。すぐそこに、そんな人用に U ターンレーンができている。これを利用して難なく戻ることができた。高速道路で U ターンをするのだから、これがアメ

リカ式と言いたい。今度は機嫌よく、よく整備されたちょっと山岳道路気分の 55 号をまっしぐらに南に向けて飛ばしにとばした。制限速度は、70 マイルであるから、速度の自動制御を 80 マイルに設定する。そうすると、今度は道路がまっすぐなだけに運転と言っても何もすることがない。よく、飛行機にのっていると、高度一万メートルに飛行機が上昇すると、機長がぶらぶらと手持ち無沙汰にしているようであるが、まさにその気持ちが分かる。単調なドライブだ。手のやり場に困る。時々地図を見て、あと何キロで途中の大きな街につくか、このあたりで交差している道路はどこまで続いているのかなどとハンドルの上に地図を乗せて調べてみる。ところが、悲しいことに、老眼ときているからほとんど字が読めず、かと言って、めがねをはずすわけにもゆかず。こんなドライブが、一時間も二時間も続く。

　とうとう、ニューオーリンズだ

途中、ジャクソンという大きな街をとおる。ここはミシシッピー州の州都でもあるので、一旦、ここで高速を降りて町を徘徊することとした。もうそろそろかな、と思っていたら、すぐその前にカントンという小さな町があり、そこに NISSAN PATHWAY という字を見つけた。えらい日産も有名になったな。あるいは、日産とは特別な意味でもあるのかなと思っていたら、突如、日産のマークのついた大工場が高速道路の脇に開けてきた。これはびっくり、日産がアメリカに作った工場がここ、ミシシッピーのカントンという町にあったわけだ。どうしてここを選んだのか聞いたことはないが、たしかに南アメリカの重要な都市であるジャクソンに近いので交通の便は良いかもしれない。がとにかくアメリカは広い。ここまでの道のりを考えながら、ここで作った自動車をアメリカ全土に配車するとしたらどうするのだろうかと、他人事ながら心配をした。そうこうしているうちに車はジャクソンの中心街についた。地図から言えば　北のほうから来たので、後々のことも考えてできるだけ南まで高速道路に乗ることにした。そして、

長さ 40Km もある長い橋

街の中心街に来たところで、高速を降り、街中を見物することにした。といっても、あまり細かいところまでゆくと、また戻るのに苦労する。とにかく、メイン道路のみ走ること。暫くいくと、見たことのあるような建物がある。あれこれ考えた挙句、それが、どうもホワイトハウスに似ていることに気付いた。朝も早かったのでほとんど人影もなく、この街の象徴のような建物を一人楽しむことができた。それから、暫く街中をドライブしたが、カメラ片手に撮影に夢中になっていたら、二度も信号無視をしていた。これは危険と、いい加減にあきらめて、再度、高速にのり。一路ニューオーリンズへ。天気は快晴。気分爽快。ああ、そうかいなっ、てな調子。ジャクソンからおよそ一時間あまり。やがて、車はルイジアナ州に入った。早速、Welcome Center により、地図をもらう。さすがにこちらは暖かい。思わずジャージーを脱いだ。さあ、ここが、ミシシッピー川がメキシコ湾に流れこむところだ。そして、アメリカ大陸がメキシコ湾に望む土地だ。ああ、とうとうここまで来たか。ミシシッピー川が広大な三角州を作り、その川を遡りアメリカにヨーロッパの文化が浸透していったわけだ。

ニーオーリンズは、実はここからポントチャートレインという中海を渡らなければならない。ちょうど松江の宍道湖のような感じ。この湖の真ん中に橋が掛かっている。この橋は古い地図には乗っていないので、比較てき最近できたのかも知れない。有料の橋道路である。東京湾のアクゥアラインが数千円と聞いたのでどれほど取られるかと思ったが、ところが、これがびっくり。料金が 3 ドル。安いばかりではない。とにかく長いのだ。どれくらいかと思い、橋に乗り始めから計った。行けども、行けども橋である。結局、25 マイルあった。40 キロの橋。東京湾の一番広いところでこれくらいか。とてつもない大きさだ。これがアメリカなのかも知れない。対岸のニューオーリンズは橋の真ん中あたりまで行かないと見えてこない。もちろん海があれている時はわたることができないかも知れないが、この日は快晴。とにかく、両脇の真っ青の海を眺めながら、約三十分の海上ドライブ。これが 3 ドルで楽しめるときたから、応えられない。アメリカの大きさを表現するにはコロラドの大キャニオン、ロッキーの氷河、テキサスの砂漠、五大湖などいろいろあるかもしれないが、こんな身近なところにも想像を絶するようなアメリカの偉大さを示すものがあるではないか。これがアメリカと言いたい。

橋を渡り、ニューオーリンズの町までドライブ。さすがにここは、交易の町。古くから栄えていたのであろう。また、大陸と違って土地も貴重かな。そんなわけで、高層ビルが立ち並んでいる。町におりたら、雰囲気はジャズのムードが流れている。住宅も南国風でこじんまりとよく整備されている。中流か、下流の住宅街でも、家の前にはテラスがあるし、古いヨーロッパ調のつくりでとても落ち着いた町だ。通りにはフェニックス並木があり、木々にはまだまだ緑があふれている。

せっかくここまで来たのであるから、とにかくミシシッピーの三角州をドライブして見なくては。その偉大さを肌で感じなくては。そう考えて、このミシシッピーの三角州を横切るように走っている高速 90 号線に入ることにした。およそ 200 マイルほどの距離である

が、これがミシシッピーのつくった三角州の横幅ということになる。この高速をおりてさらに南に行けば、ガルフ湾であり、正真正銘のメキシコ湾ということになる。ところが、それには、さらに 30 マイルくらい走らなくてはならない。しかし、それをここまできてメキシコ湾を見なかった口実にしてはならない、と。思い切り、途中でわき道に入る。この bayou とやたら目につく土地を海に向ってドライブすることにした。辞書では、「湿原の中の川の支流、沼のような入り江」とある。途中、ここでも、Airport a road とかかれた道を飛ばす。さらに今度は、ボートハウスで生活している人たちの部落を通りすぎ、あとは、もうどうしようもないくらいのくねくね道を通って、たどりついたのが、Dead End の標識。もうこの先に道はない。あるのはメキシコ湾に注ぐミシシッピーの水しかないというところまで来た。「やったー。とうとうここまで来たぞ。ここまで、来たことのある奴は名を名乗れ」の気分。まさに爽快。来た甲斐があった。さあ、これからはもう south の標識とは縁がない。あとは north に向って帰るだけだ。

この先は、もうメキシコ湾

アメリカで焼畑をみた

この三角州をドライブしていて驚いたことに、なんとアメリカで焼畑をしているではないか。ここは、まだ、それこそジャングルというにふさわしいような森がたくさん残っていて、これを十分に利用しきれていない。土地はミシシッピーが運んでくれた肥沃な土地だ。作物を作れば何でも育つ。ところが、とにかく、ここは広すぎる。土地はいくらでもあるが、これを整備する人間のほうが少ない。そんなところから、新しく農作物を作るために切り開いた土地は枯れ草を燃やして肥料にしているのである。焼き畑ならず、焼き草農業である。この煙が高速道路に遠慮なく覆いかぶさり、それはひどいものだ。日本ならさしずめ公害ですぐに大問題になるところ。ところがこの広いアメリカ。煙がひどいと言ったって、そのうちどこかに消えていく。この方が合理的だと思えば、文句を言う人もいない。文句があるなら、あんたここからどこへでも行ったら。あなたの住むところなどどこにでも、いくらでもこのアメリカにはある、という感じ。そんな感じのする家が山のなか、湿原のなか、川のほとり、いたるところにある。何をやっても他人に迷惑がかからなければよいのだ。この文明の進んだアメリカでも、焼畑が行われているということ。これがアメリカなのかもしれない。

ガーデンハウスって何?

実は、この湿原のドライブは、また、別の景観鑑賞ドライブコースになっており、そんなことから、時間はあまりなかったが、一旦、高速を降りて一般道を走ることにした。なんの変哲もないコースかなと思っていたら、途中で、フランクリンという街に入った。すると道路にガーデンハウスと書かれたストリートに入った。ふつうの道路ではあるが、これがまたきれいに飾られた道路で、その両脇にある家がまたすごい。どの家も道路までにフロントガーデンがあり、これがきれいに整備されている。そしてその奥にある家が、これがまた素晴らしい。ふつう、アメリカの家では、少しましな家になると小さなベランダがついていて、そこにプランコチェアーがあり、そこの家の人がコーヒーなど飲みながら、読書を楽しめるといった具合である。それでも、インディアナのような田舎ではこうしたベランダつきの家はあまり見かけることはない。ところが、もう少しお金もちの家となると、一階の周りが総ベランダになっている。回廊のような感じだ。そして、その回廊にいろいろなデコレーションがなされていて、相当見る人の目を楽しませてくれる。ヨーロッパのギリシャ風か、ローマ風の家という表現がよいのか。とにかく、二階建て、三階建ての家が、映画に出てくるような館風である。そして、ここフランクリンのガーデンハウスというのがちょうどそんな感じ。中途半端ではない。通りに面する家はどこの家も、一階が総ベランダというばかりでなく、二階にもベランダがあるのである。こうなると、家が、本当に個人の住んでいる家かなという感じ。一軒だけならまだしも、ここは次の家も、そのまた次の家も、これ見よがしの総ベランダ。とにかく、「風とともに去りぬ。」の舞台となるような家ばかりである。これこそ、まさに、嘗てヨーロッパの文化の華が咲いた証拠ではないかと感じた次第である。

この日は、だいぶ長旅になり、ジャクソンまで戻る予定を大幅に変更して、ルイジアナに泊まることにした。Lafayette という町がある。同じ名前の都市がインディアナにもある。

この人はとにかくフランス人でありながらアメリカの独立戦争に従軍して有名になった人。アメリカにはこの人のついた町がどこにもある。古いフランスの威風をいまに残しているのである。この町が北緯 30 度くらいであるから、日本の沖縄くらいかな。緯度で言えば、仙台から沖縄まで来たことになる。うへぇー。

フランクリンのヨーロッパ調の家

三日目

バトン・ルージュの町

とにかく、アメリカの南海岸まで来た。さあ、これからは、仕事の待っているインディアナまで、一路、北への旅がはじまる。さすがに昨日の強行軍がたたり、この日は朝寝坊からはじまり、ハプニングの連続である。ラファイエットをでて、すぐに 12 号線を東に向う。海岸線から百マイル以上離れているので、陸を走る高速道路かと思ったら、これがなんと、湿原の上に掛けられた橋の高速道路だ。両脇が水面の下に根を生やした木々が立ち並ぶ、ちょうどアマゾンを思わせるような光景だ。まさか、満潮になり一面海になるのではないだろうが、それでもこの湿原の大きさ、数十マイル続いている。時々空気を入れ替えるために窓をあけたら、なんとなくどぶ臭いにおいがしたのは気のせいであろうか。およそ一時間でバトンルージュという街に着く。名前が気に入ったので、是非、街を回って見たいと思い、高速を降りて少しドライブをした。ここにも街の象徴となるような高い塔が立っていた。このあたりをぐるぐる回っていたら、パトカーが不審におもったのか、中から警官がじろじろ見ている。そこで、すかさず、窓を開けて、「手紙を出したいのだが、郵便局を知らないか」と訪ねた。すると、機嫌よく、「ダウンタウンにいけ、すぐ分かる」と言う。「この街は初めてだから、分からない」と言うと、「じゃ、案内するから、あとからついて来い」と。あとで考えたら、このとき素直について行けばよかった。ついつい遠慮して「時間がないから、結構」と断ってしまった。馬鹿なことをした。パトカーに案内されて郵便局に言っただけでも話題になるのに。まことに残念。仕方なく、これでバトンルージュとお別れ。でも、このバトンルージュと言う町は、工業都市で、またのあちこちに立派な工場がたくさんあ

湿原の夜明け

バトン・ルージュの町

り、しかも、そこからはもくもくと煙が立ちこめ、いかにも活気のある町という気がして、とても気に入った。砂糖・米・綿花の取引が盛んンに行われているところで、また、製油・化学工業の発達している都市とのことである。

あっ。橋がない。さあ、たいへん。

さあ、ここから、高速で 61 号にのれば、目的のナチスに着く。ここは今回のドライブの最大の目的である、ナチス・トレースというドライブコースの基点でもあり、なんとしても一刻もはやくたどりつかなくては。そんな気持ちで、高速 190 号に乗ったのだが、途中、分岐点を見逃し、車は、西へ西へと向う直線道路に入ってしまった。ミシシッピーに行かなくてはならないのにルイジアナのおくのほうに向っているのだ。それに気がつき、途中で、北に向う小さな道路のわき道にそれた。False River という標識がある。面白そうな名前である。何かなという興味もあり、とにかくこの道を北に進むことにいた。ローカルな道になると三桁の番号がついており、これでは、よほど詳しい地図がないと、どこを走っているか分からない。頼りになるのは、太陽の影だけ。自分の車の向きをみて走るしかない。やっとのことで、Lakeland と言う町に着いた。ここは、ミシシッピー川が蛇行して、三日月の池をつくったところにレジャータウンができたもので、町は全部、この池、といっても随分と長くもので、湖みたいなものだ。ここで水上スキーや、ボート遊びができるのであろう。金持ちのレゾートタウンなのであろう。まわりの家はとにかく優雅である。屋敷は広々とした庭がついており、ベランダが家の周りをぐるりと囲んでいる。この庭の前の道路をよこぎると湖に続く庭があり、ここには、ボートハウスとマリンポートがある。もちろん、どこの家にもついている。湖を囲んで、ぐるり　　フェリーでミシシッピー川を渡る
とこんな町が延延と続くのだからあき
れたものだ。やがてニューロードという町に着き、ここで出しそびれた郵便物を出すことにした。郵便局の場所を聞くのだが、このあたりは黒人が多く、そのはなし言葉がぜんぜんわからない。それでも、偶然かどうか、教えてもらったとおりに探していたら、なんと郵便局が見つかったではないか。ここのスタンプの押された郵便物をみて、さて、どう思うかな。

手紙の発送が終わり、これで、いよいよナチスに向わなくてはと、地図をみて、ミシシッピーをわたる道を探した。が、どうも様子がおかしい。走っている道にはいけども行けども橋らしきものはなく、だんだん南の方に向っている。これでは、またバトンルージュ

に戻る感じだ。十分近く土手のような道を走り思い切り決断した。これは間違いだ、逆戻りしようと。今度は、今来た道を猛スピードで戻ることにした。さあ、それでもいけども行けども橋らしきものはない。地図には、しっかりとその道がかかれているのに。そのうち遠くに道を横切る車がいた。田舎道からやっと標識のある道に出られたと思い、一安心。よく見ると 10 号線と書いてある。どうもこれが、ミシシッピー川を渡る道らしい。そこで、土手の上に車を乗せたら、驚くなかれ、そこは、まさにミシシッピー川がとうとうと流れている。が橋などない。しまった、道が違うのかと、もう、そのときには気も動転状態。これでは、川は渡れない。バトンルージュまで戻るか、それとも、アレキサンドリアまで行くか。でも、さっき前を横切った自動車はどこに行ったのか。と思いなおし、冷静になったら、そこには薄汚れたフェリーが一台待っているではないか。それに、車が乗り込んでいるのである。まさかフェリーでわたるなんて思いも及ばない。それに、いつ出るかは分からないし、ここで道草を食うわけにも行かず、乗るべきか、戻るべきか躊躇したが、それでも、ここで戻っても橋を見つけることができるわけでもなし。結局、どうにでもなれと意を決し、このフェリーに乗り込んでしまった。そして、時間が気になったので、「いつ出るのか」と聞いたら、「お前が最後だ。すぐに出る」という。「61 号に行きたいのだが、大丈夫か」。「向こうに渡れば、すぐに分かるの」とのこと。こんな形で川を渡ることなど思いもしなかったが、これが普通の 10 号線とのこと。運が良かったとしか言いようがない。もし、ここで諦めていたら、到底、ナチスには着かない。フェリーのなかで、「わしが、61 まで案内してあげる」と、人懐こく親切な黒人が出てきた。車に乗せろという。まあ、そこまでいうのに悪人はなかろうと、よしと意を決し乗せて案内をしてもらうことにした。フェリーの代金は、ルイジアナからミシシッピーに渡る車は無料。ただし、反対にミシシッピーからこのフェリーを利用する人は一ドル払うのだそうだ。で結局、私は只。ラッキーという感じ。川の流れは急だが、アットいう間にフェリーは対岸についた。ここで、この黒人を乗せ、61 まで案内してもらったが、この人の話では、このあたりは急にレゾートタウンとして開け始め、自分もこの近くのホテルで働いているとのこと。ナチスには、自分の父親が住んでいると仕切りに説明していた。とにかく、日本から来た珍客に驚くこと仕切り。この親切兄さんには、十ドルをお礼として上げて機嫌よく分かれた。それにしても偶然にもフェリーを見つけ、待ち時間なしでミシシッピー川を渡り、道案内までしてもらい、このたびは何から何まで、ハプニングの連続である。

ナチスに到着

ナチスと言う町も、また、古くから栄えた町で、とにかくヨーロッパの風格のある街なみが見事であった。どの家も二階までテラスがあり、決して大きな屋敷ではないが、どこの家も良く整備されていて、とても優雅である。夢を感じさせる町という形容がぴったりである。この町を基点としてナチス・トレースと呼ばれる道がナッシュビルまで続いている。やく、400 マイルの道をドライブすることにした。道路は森のなかにあるが、これは、

昔この道を通り、北へ北へと開拓が進んでいったとか。途中には、100 年以上も前に開発された農場が紹介されていたり、また、独立戦争のころのことが刻まれたモニュメントがあったりする。森の中の道とはいえ、道路は高速道路並みに、しかも、自然と調和する形で整備されていて、ここをドライブしているだけでも気分が爽快になる。結局、この日は、ナチスからジャクソンを超えて、Tupelo と言う町まで、このトレースを走ることとなった。途中、気分は爽快、森のにおいを満喫して走っていたら、ガソリンがなくなりそうになり、さあ、大変。とにかく、この道路にはガソリンスタンドはないのだ。気付いたときにはあと残りはわずか。道のりはまだ、150 マイルは残っている。ガス欠を起こすことは必至。何とかしなければと思い。一旦、トレースをおり、周りの町を探すことにした。ところが、これがまた大変。ふつうの道路でも、小さな村にはガソリンスタンドなどない。ひとつの村になければ次の町まで行くしかない。ところが、こちらでは隣の町までは、十マイル、二十マイルはふつう。ひどい場合には、数十マイルも離れていることがある。こんなところでエンストでは、と冷や汗をかきながら、天にも祈る気持ちで走っていたら、なんと、一軒だけあった。しかも、この一軒に何台も、何台もつぎから次へとガソリンを入れにくる。このスタンドはこのあたりの貴重な一軒なのであろう。よくも、こんなところで、偶然にもこのスタンドを見つけたものだ。ここで、満タンにしたら、急に自分が昼ごはんも食べずに、必至になっていたことに気がつき、急にお腹が空いてきた。これで、ガソリン満タン、お腹も満腹、まずはめでたしめでたしということになった。

また、道に迷いました。

ジャクソンで、また、ジャンクションを間違え、トレースを外れてしまった。暫く、OLD CANTON　という道を走った。このカントンという町は、来るときにジャクソンの町に入る前に日産の工場のあるところとして分かっていたので、方角さえ間違えなければ、またもとの道にたどれると、ただ、ひたすら北に走り、そして、東に走ることにした。そうすれば、北東に行くことになる。

こうして 10 マイルくらい道に迷った。住宅街を走ったり、田舎道を走ったりして、とんだ道草をくったが、こうしたわき道にそれたほうがアメリカの本当の姿が見えてきて楽しい。庭の中に池のある家など、立派というより、これは、もう、自然との調和を考えて、とにかくそこに住んでいるという感じ。決して贅沢でも、なんでもないのである。池がそこにあっただけのこと。自然をうまく取り入れ、自然とともに生活しているアメリ

ナチス・トレース　こんな道が 400 ㌔

カ人がよく理解できる。とにかく、生活は楽しまなくてはという雰囲気が漂っている。

ナチス・トレースに無事戻り、また、ひたすら森林道路を走りにはしる。適当に道がくねっているのは、これが、自然にできた道なのか、あるいは、ドライブを楽しむためにわざわざつくったのかはわからないが、この道路がよく整備されている。いくつかのクリークをわたり、時たま、急に森が開けて農場が現れる。そこではたくさんの牛がのんびりと草を食んでいる。このトレースでは、人や車よりも牛のほうがたくさんお目にかかれるのだ。途中に、フレンチキャンプというところがある。ここは、かってフランス人がたくさん住んでいた名残であろう。多分、今でも英語ではなくフランス語が日常会話に話されている町ではないかと思う。こうした特殊な町ができるのも広いアメリカではそれが自然なのかも知れない。この頃から、だんだん回りが暗くなり始め、夜のドライブということになった。とにかく、わき道にそれなければ、この一本道をどこまでも進めばよいので安心して走れる。ただ、昼間は楽しかった適当なカーブだが、今度は少しも気を緩めることができない。この道は対面交通になっているので、前に速度の遅い車がいるとなかなか追い越しができない。しかも、カープであるのでどこまでこの道がまっすぐなのか良く分からないのである。それでも、暗くなり時間はたつばかりであるので、何度か追い越しを掛けた。そのたびに少し身の縮まる思いをしたが、これもまた旅の思い出だ。

目的のテプラには七時過ぎについた。この日も長旅となったが。無事、宿にたどりつくことができ、まずは一安心。いよいよあしたは最後のドライブだ。無事であることを願いながら、持って来たティキーラをコーク割りして味わう。これが、また最高に美味い。

第四日目

エルビス・プレスリーの誕生の家

たまたま、昨日がんばって、TUPELO という町までたどりついた。ナチスからナッシュビルまでのこのナチストレースのほぼ中間くらいにある小さな町である。とくにここに最初から泊まると決めていたわけではないが、何とか、明日のドライブの距離を考えるとなんとしてでもここぐらいという感じで選んだ。そして、昨日のよる何の気なしにホテルの地元紹介のところを読んでいたら、なんとここが、かの有名なエルビス・プレスリーの生まれた土地だとのこと。近くにその生誕の家まであるとのことで、これは、なんとしてでも見に行かなくてはということになった。そして、まだ、夜があけたばかりの町を、きょろきょろしながらのドライブでようやく、その場所を見つけた。近くにある池は Elvis Presley Lake と名づけられ、魚釣りや、水泳、ボートが楽しめる憩いの場所になっているとのこと。ちなみにこの Tupelo の町の紹介を英文でしよう。

History of Tupelo

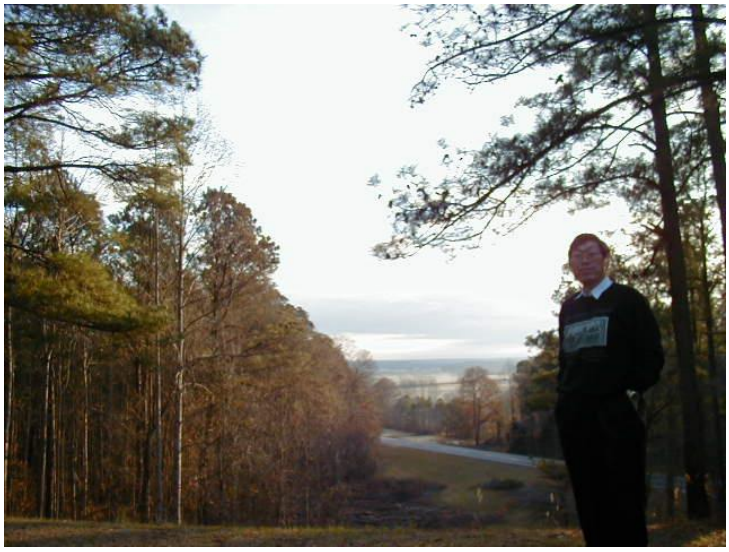
From the land of Chickasaw Indians, Spanish (DeSoto) and French (Bienville) settlers and through the Civil War, Tupelo grew and received its charter in 1870, four years after Lee County was created. Prior to that time, the Mobile and the Ohio Railroad

was located here, along with a store, two saloons and a temporary railroad station. The town was named for the gum trees located here. In 1886, the first drainage laws in the nation were passed in Lee County to clear the swamp in this are.　Tupelo received national recognition in 1901 when it was chosen as the site for the first U.S.Fish Hatchery

とある。

また、ガイドにはバトルフィールドというのがあり、ここでも有名な戦闘があったようだ。Tupelo の戦いというらしい。1864 年に南と北の軍がここで遭遇し、たたかったとのことである。確かに、この道自体が南から北への進出ルートになっているのだから、この道沿いにはこうした戦いの場が至るところにあった。それぞれに戦いの名前がついており、この広い平原では双方の軍が出くわすこと自体が偶然かと思われるが、とにかくそれにしてもわずか 100 年か 150 年前のことであるから、つい最近のことなのである。そんなことからかも知れないが、ビンセンスでも「ランデブー」という昔の戦いを模した模擬戦闘をするお祭りかあるが、おじいちゃん、おばあちゃんの衣装を大事にしまっておき、これを孫が着て、その当時を偲ぶ戦い祭りがいたるところでお祭りのように催されているようだ。

ここには、おおきな自動車博物館があり、クラシックカーから未来の車まで存分の堪能できるとのことであるが、残念ながら今回は行くことが出来なかった。



突然の大平原

ナチストレースは山間を走っている感じのするドライブウェイである。まわりは森林で、あたりには人家はほとんどみることができない。しかも、このドライブウェイには、信号のついた交差点はない。ほとんど民間の生活道路とは隔離されている。たまに、町にでる分岐点があるが、ここにも信号などない。車もたまにしか通っていないし、ここを利用するひとは自然を満喫することが楽しみのひとであり、行楽とは言え、数珠繋ぎに車が入るようなことはないのであろう。一旦停止し、車が通り過ぎるのを待てば良いのだ。その車と車が出くわす確立など、ほとんど１パーセント以下だ。むしろ、突然開けた牧草地にみる牛の数のほうが、出くわす頻度が高い。ところが、この道路の両脇、一山超えたところには生活している人もいることは確かだ。そうした人のための生活道路は、このナチストレースと並行して、ほとんど両側に並行に走っている。だから、この道に入る必要もない。そんなにまで、自然のなかで守ら

れている道路で、大変なことは、ガソリンスタンドがないし、また、食べ物を調達できるような店もない。必要になれば、この道から脇にそれて生活道路を走るか、あらかじめ用意をしていかなくてはならないのだ。なかなかよそ者ではそこまで気が回らないが、アメリカでレジャーを楽しむのにはそれくらいは常識なのかもしれない。

鳥の大群

森林のなかをやや退屈しのぎのカーブを楽しみながらドライブしていたら、突然林が開け、そこにまるで、黒い絨毯を敷き詰めた一面に散らばったものが目に入った。それが時々、一斉に少しずつ動くのである。よく見ると、なんとそれは地に下りた鳥の大群である。草のなかの虫を食んでいるのだろうか。それにしてもその多さにびっくり。一部の群がりが少し動いただけで、まるで、黒い大波が押し寄せるような感じだ。これを見て、すぐにヒッチコックのかもめの大群に襲われる映画を思い出した。鳥が人間を襲うなんて、なんであんな発想が生まれるのかな、と思ったことがあるが、確かにここの鳥の大きさと数は並みではない。一斉に飛び立つとまさに空一面に鳥だらけの感じだ。こうしたことが現実に目の前にあるのだから、あの発想が決して偶然でも、奇抜なアイディアでもなく、ごく自然にあることなのだと、改めて、このアメリカのスケールの大きさに感心した次第である。

きつつきさん、それはないよ

そんな鳥の生態を驚きで経験したのと同時に、また、面白い発見もした。両脇の林のなかの何本かの木の下に、いやに白い木屑がたまっているではないか。なぜだろうといろいろ考えたのだが、どの木もという訳ではないし、また、この木屑のあるのは、ある大きさのものだけ。また、あるところには数本が固まっている。結局、これは、きつつきが木をつついて巣を作った痕跡ではないかということになった。もしそうだとしたら、きつつきさんにはご苦労だが、この木屑のところには必ず巣があると一目瞭然ということになる。それでも、きつつきが安全なのが、このトレースの偉大なところかな。

ダムサイト

このアメリカの大地には、川がたくさん流れていても、土地そのものに高低差がないから、発電や、灌漑のための水を確保することが非常に難しい。とにかく、この大地の下はすぐに岩になっているので、土地を平らにすることなど到底考えも及ばない。とにかく自然のままやるしかない。そこで、いろいろと工夫をして治水をしているひとつの例がダムである。このトレースもいくつかの水路を横切っているがそのひとつがテネシー川に流れ込むトムビグビーという水系だ。ここにはダムでせき止められた湖ができていて、一だいレゾート地になっている。それにしてもミシシッピー川が南に向って流れているのに、このテネシー川に注ぐ川は延々と北に向って流れているからアメリカの大地の複雑さを感ずる。

テネシーがわを渡る

そのテネシー川を渡るがここがちょうど、このトレースが、たった 31 マイルだが、ルイジアナに入るところにあたる。とにかく、このテネシー川も大きい。水が流れているのかどうか分からないくらいの広さがある。ほとんど湖をいってよいくらいだが、蛇行を重ねて、やがてケンタッキー州に入り、オハイオ川と合流しているのだ。ただ、ここの水は森林のなかを流れてきただけあり、青い色をしていて、いかにも日本の湖を思わせるようなものであった。

テネシー川をバックに

デイビス・クロケット・パークで

エルビス・プレスリーの生誕の家を探して気をよくし、ついでに、デイビー・クロケット公園があると言うので、これを訪ねることにした。デイビー・クロケットといえば、負ける戦と知りながらアラモの砦に駆けつけた、西部の勇者で有名。そのクロケットにちなんだものかと勢い込んで尋ねていった。公園はキャンプサイトになっていて、いまちょうど冬で閑散としていたが、非常によくできたキャンプサイトであった。そこの公園の事務所を尋ねて、「日本から来た、もとボーススカウトのリーダーをしたことがある者だ」と言ったら、そこにいたお姉さんが非常に雄弁に、この公園の成り立ちを解説してくれた。奥の方からファイルを取り出してきてくれて、得意げにしてくれた話では、この公園を開いたのは、実は、デイビス・クロケットで、デイビー・クロケットの息子とのこと。かれは、この地でうまれ、ここに、住み着いて、ここを開拓するのに偉大な貢献をしたとのことである。その彼の事業をたたえて、いまここにかれのキャンプサイトができているが、その広さは車で一回りするのに 20 分近くかかる。サイトの中には、大きな池があり、ここにはわたり鳥がたくさん、来ているし、また、射撃場、レストラン、なども整備されている。もちろんテントを張る場所はあるが、これは、数え切れないほど。100 以上あるとのこと。

ちなみに、アラモの砦はテキサスにあり、それはここから車で数十時間かかるとのこと。以上、親切な解説のお姉さんと親しくなったいきさつです。

コロンバスで道に迷う。

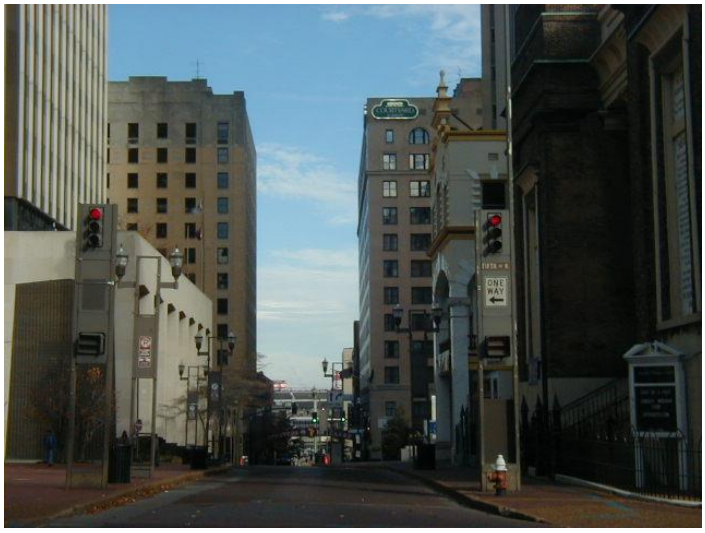
そのお姉さんに教わり、ナチストレースに戻るのではなく、一般道路をナッシュビル

に向うことにした。途中コロンバスという町を通る。この町なかでもやはり立派な建物が見つかったが、それがどこにでもある立派なロータリーの中心となっている建物。どうして、こうしたつくりにしたのか、ちょうど、パリやローマなどでも町の中心に大きな建物をつくり、ここから、四方八方に町を発展させていくやり方だ。縦横しっかりと名前のついた道路のつくりとは一味違う感じがする。

ナッシュビル

コロシアムの異様なうなり

たまたま高速をおりたら、そこがナッシュビルのメインストリート。と言っても、通りは狭く、片側通行。その炉端には駐車している車があるので、やっと車一台が通れる程度。でも、スピードを出す必要がないし、また、ゆっくりとおりを確認しながら走れるので、これ幸いである。川に突き当たったところで、この通りが終わるが、その川の向こうに大きなコロシアムがある。よく見れば十階建てくらいのスタンドに人がびっしり。時々、うわぁーという唸り声がする。そのうち場内マイクで、ファーストダウンやら、人の名前を叫ぶ声がする。あの、アメリカンフットボールの雰囲気である。それにしてもあの唸りはなんだ。地の底からグーッと盛り上がってくるような空気の振動のようなものを感ずる。人々がゲームのプレーに興奮しているのである。とんだところで本場アメリカのフットボールのスタンドの雰囲気を感ずることができた。



ナッシュビルの町

ナッシュビルの町は、とても近代的な感じのする街である。それでも、街角のあちこちに協会やら、古いヨーロッパ風の大きな建物が目に付き、これが、近代構想ビルとよくマッチしている。とにかく、アメリカの都市と言っても、場所は十分にあるので、ひとつの建物が十分なスペースを持っている。それだけに特徴的な建物はよその建物に邪魔をされず、その偉容を存分に発揮することができるのだ。

だれかが、メンフィスと比べてナッシュビルが素敵だといったが、メンフィスは、やたら古臭いような気がしたし、また、町事態も雑然としている。それに比べナッシュビルはまず、町の大きさが違う。ダウンタウンとベットタウンは車でも 20、30 分は離れているし、また、町のつくりも整然としている。是非、もう一度ナッシュビルには遊びに来たい。そんな後ろ髪を引かれる思いで、Vincennes に着く時間を気にしながら、ここを出発すること

にした。

有料道路

ナッシュビルから一路 65 号線を北に向う。ボーリンググリーンと言う町で今度はオーエンスボルグへと進路を北西にとる。この道は有料道路になっている。ケンタッキーは東西に長い州であり、メンフィスからレキシントンやノックスビルまで長い道路が何本か並行に走っている。これらは東西に走っており、こうした高速道路は南北に結ぶ比較的新しい道路だ。これが有料道路ということでここを走ってみた。とにかく、アメリカの高速道路はよく整備されていて、無料でどこにでもいけるからあまり道路の良いことにありがたみがなくなってくる。そこで、この有料道路はどうかな、と思ったが、さして普通のものと変わらないやはりここにもパトカーがスピード違反を取り締まっていた。やや高原という感じの風景を見ながらただ走るのだが、気がついたらやはりジャンクションが圧倒的にすくない。ということは、周りに町がないということ。人も少ないということ。こんな道で何かあったらそれこそ大変なことになる。夕焼けの太陽を背中に受けて車はだんだんイリノイに近づいてくる。山々の木々にもうすっかり木の葉がなくなっているのを見ると、随分北に来たものだと感ずる。この有料道路、いくらかと思ったら、ジャンクションで出入りが自由であるから、途中、途中に何箇所かの料金所があり、三つくらいのゲートを一人の監視員が居て、金を徴収している。つりのないように出すことになっているゲートは、大きなバケツのようなところにコインを投げ込めば、信号が青になる。ただそれだれであるが、この料金、最初が 50 ｾﾝﾄ、次のゲートで 60 ｾﾝﾄ、そして、三回目が 40 ｾﾝﾄであった。とにかく、高速でもただというアメリカの道路事情で、安いとは言え、この有料道路の持つ意味は一体何なのだろうかと考えてしまった。

アメリカの高速道路

今回の旅で、アメリカの大きさを表現するには、とにかく時間のスケールが違うということが一番ぴったりのような気がしました。これが結論です。　　(Dec.30.2003)